

I 調査の設計と概要

1 調査の設計に係る基本的な考え方

(1) 調査の目的

ア（調査の内容）全ての子どもに、義務教育期間を通じ、よりよい人生を切り拓く基盤となる学力を確実に身に付けさせる観点から、杉並区立学校児童・生徒の①基礎的・基本的な知識及び技能の習得状況及び、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他能力の育成状況並びに、③生活・学習状況、意識を把握する。

イ（結果の活用）調査結果は、教育に関する継続的な検証改善サイクルの一環として、①児童・生徒が自らの学習状況を振り返り、次の学習の糧とすること、②教師が自らの指導・評価の状況を省察し、特定の内容でのつまずき、学び残しの解消を重点とした指導・評価の改善を図ること、③教育行政が教育施策の成果と課題を検証し、学校の実情により応じた施策展開を図ること等に活用する。

(2) 調査の対象・方式、内容

ア 対象・方式

対象	方式
小学校第3・4学年児童、中学校第1学年生徒	悉皆
小学校第5・6学年児童、中学校第2・3学年生徒	各学校の希望利用

※ 特別支援学校及び小・中学校の特別支援学級在籍の児童・生徒のうち、①下学年の内容などに代替して指導を受けている場合、②知的障がいである児童・生徒に対する教育を行う特別支援学校の教科の内容の指導を受けている場合は、対象としないことを原則とする。

イ 内容

名称	内容
特定の課題に対する調査 (教科等に関する調査)	国語科、算数・数学科、理科、外国語 ・学習指導要領に準拠した上で、①当該教科等における調査実施の前学年の目標・内容(事項)を出題趣旨とし、②日常的な学習活動に即す出題内容及び回答形式、並びに採点規準による設問から構成 ※各教科の1単位時間に位置付けて実施
意識・実態調査 (学習・生活についてのアンケート)	学習・生活についてのアンケート ・①自らの道を拓く【自己効力感(自由の感度)】、共に生きる【他者への／からの受容(相互承認の感度)】【集合的(社会)効力感(相互触発の感度)】等の自己意識や【生活習慣】等の生活実態、②【学び方】【学びの個別化／協同化／課題探究化】【各教科等学習活動】【ICTの利活用】等の学習状況の諸側面を観点とした設問から構成 ※学級活動の1単位時間等に位置付けて実施

(3) 学習指導要領に準拠した【系統性】の理解に基づく【連続性】を確保した設問

ア 出題趣旨の決定と設問レベルの設定

各設問について、当該教科等の義務教育9年間を通した目標・内容(事項)の【系統性】及び学習評価の観点に基づき、出題の趣旨を決定する。

基礎CとBとして設定される設問は100%の(準)通過率を目標とする、つまり、全児童・生徒に確実に習得させる「基礎的・基本的な知識及び技能」を出題趣旨とする。活用AやSは、全児童・生徒により一層の育成を目指す「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他能力」を出題趣旨とする。

設問レベル		出題趣旨		全設問に占める割合
活用	活用S	調査実施の 前学年の 目標・内容 (事項)	自ら活用する能力	35%程度
	活用A		思考力・判断力・表現力	
基礎	基礎B		主として基礎的・基本的な技能	65%程度
	基礎C		主として基礎的・基本的な知識	

イ 出題内容及び回答形式、採点規準の設定

出題趣旨とレベルを踏まえ、学習指導要領の目標・内容(事項)を系統的に実現する【連続性】を確保した言語活動、観察・調査活動、算数・数学的活動や問題解決活動、コミュニケーション活動によっておのずと(準)通過できる設問となるよう、出題内容及び回答形式、採点規準を設定する。

〔(設問の例)中学校第2学年外国語「聞いた話の要点をメモする」設問〕

- 出題趣旨：エ 書くこと(ウ) 聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想、賛否やその理由を書いたりなどすること。【外国語理解の能力】
- 設問レベル：活用S(「自ら活用できる」状況で(準)通過できる設問)
- 出題内容：(リスニング)これから、スピーチをします。その後、三つの質問をします。スピーチ文と質問は通して読み、もう1度繰り返して読みます。
〔中略〕放送を聞きながら、メモ欄に必要なメモを英語で書きなさい。
- 回答形式：記述
- 採点規準：複合条件(設定複数の条件のうち、満たした条件数で(準)通過を評価)
- 学習指導要領を実現するための学習指導(コミュニケーション活動)の展開例：

学習活動	○指導事項 ☆指導上の留意点	学習活動に即した具体的な 評価規準【観点】(方法・材料)
3 空港でのアナウンスを聞き、搭乗に必要なことを英語でメモする。 〔以下はメモの視点例〕 ・ゲート ・搭乗の開始時刻 ・出発時刻 等	○聞いたことについて(英語で)メモをとること。 ☆スペリングミスにこだわらず、文の流れに乗ってメモをとるように促す。	・うまく書けないところがあっても、聞いたことを英語でメモし続けようとしている。 【コミュニケーションへの 関心・意欲・態度】 ・聞いたことを英語でメモしている。【外国語理解の能力】 (観察・メモ)

2 調査結果に基づく学習状況の評定と結果の取扱い・活用

(1) 学習指導要領に準拠した設問レベルに基づく学習状況の評定

調査結果は、平均正答率やその標準偏差、度数分布、設問ごとの(準)通過率といった基本統計量を算出するとともに、下表の考え方に則り、調査実施の前学年の学習状況を、学習指導要領(目標)に準拠して5段階に評価(評定)する(以下「学習状況の評定」若しくは「学力段階」という。)。これは、「測定結果の10%程度は誤差」という紙面を用いた学力測定的一般性質(限界)を踏まえ、尺度設計を「連続」から「段階」へと転換し、学力・学習状況を「段階評価」しようとする取組である。

目標に準拠した段階評価の導入により、①義務教育段階の学習指導における到達水準を具体的な設問を通して一定程度明らかにできる、②調査結果と実際の学力・学習状況の対応関係に対するアカウントビリティが向上するといった効果が期待でき、③集団や個に応じた改善方策がより一層明確になる。さらに、④取組の成果や課題を、他集団との比較や競争、すなわち集団に準拠した相対評価によらず目標(学習指導要領)に準拠して絶対的に評価・検証でき、これによって本調査は、「杉並区教育ビジョン2012」が志向する「共創」のためのコミュニケーションツールとなる。

	活用Sの設問群を(おおむね)通過	R5
	活用Aの設問群を(おおむね)通過	R4
最低限の到達目標⇒	基礎Bの設問群を(おおむね)通過	R3
	基礎Cの設問群を(おおむね)通過	R2
	基礎Cの設問群を(おおむね)通過できない	R1

(2) 各学習状況の評定の趣旨

学習指導要領の実現状況を意味する5段階の学習状況の評定(学力段階)の趣旨は、小学校段階での3段階の評定に即し概括した場合と合わせ、以下のとおりである。

“R3”は、「最低限の到達目標(水準)」と換言できる。R3の評定基準の算出には基礎CとBの設問を用いており、C・Bの設問は、義務教育9年間で全児童・生徒に確実に習得させる「基礎的・基本的な知識及び技能」を出題趣旨とするからである。

状況段階	評定の趣旨		3段階評定に概括した場合
R5	調査実施の前学年の目標・内容(事項)	発展的な力が身に付いている	3
R4		十分定着がみられる	
R3		おおむね定着がみられる(最低限の到達目標)	2
R2		特定の内容でつまずきがある	1
R1		学び残しが多い	

(3) 結果の取扱いと活用

ア 結果の取扱い

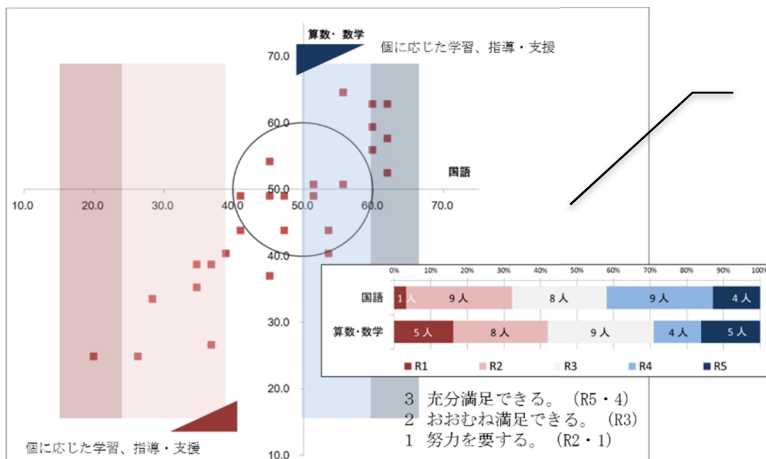
調査結果は、実施教科等が限られていることや、児童・生徒の自己評価によるものであることなどから、あくまで、学力・学習状況の一部分を紙面によって測定したものと捉える必要がある。例えば、連続尺度上の1点（正答率や通過率の1%）の差は、必ずしも、実質的な児童・生徒や学習集団の学力差とイコールではない。

イ 結果の活用

結果の活用にあたっては、上述を踏まえ、本調査の主たる役割を「学力・学習状況を目標に準拠しおおまかに分類する」ことと捉える必要がある。それゆえ最も重視すべき指標は学習状況の評定（学力段階）であり、その結果はさらに、日常的な観点別学習状況をはじめ多様な教育情報と併用することが望ましい。付言すると、本調査において正答率は、学力・学習状況を段階評価するための材料であり、連続尺度を前提し正答率そのものを代表指標にする学力調査とは、根本的に設計が異なる。

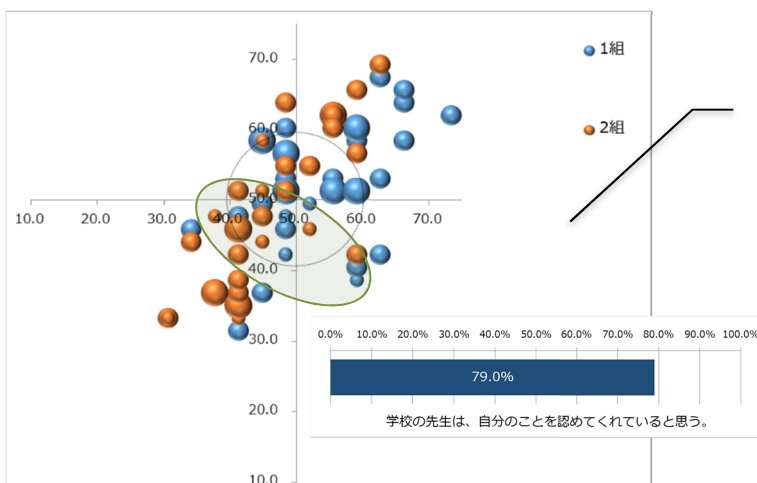
また、調査結果を散布図に重ね、個や集団に応じた指導に役立てるとともに、学年や校種を超えた【協働】の基盤として実態共有等に活用することが重要である。

〔学力段階と学力分布：調査結果に基づいた学力段階と散布図を重ね合せた例〕



- よりよい学習や指導の構想にあたっては、「個」と「集団」両者の実態に応じることが重要である。
- 左図は、集団と個の実態を直観的に把握する処理の工夫である。
- ◎ねらいと実態に応じ、多様な手だてを組合せながら、「全ての児童・生徒に」を目指していく。

〔クロスバブルチャート：学力分布と意識・実態調査の回答を重ね合せた例〕



- 左図は、「学校の先生は自分のことを認めてくれていると思う」項目に対し、肯定的に回答しているほどバブルサイズが大きくなるように処理したものである。
- 直観的・視覚的に、「中下位の層段階」に否定的回答をしている個が分布している様子が分かる。意図的な指名や支援が必要である。

3 調査の概要

(1) 調査期間

平成 28 年 5 月 11 日(水)から 13 日(金)までの 1 日を、各学校が選択して実施

※ 調査期間は、原則、連続した 3 日以上 5 日以内の学校授業日をもって設定する。

(2) 調査対象・実施の児童・生徒、学校数

	小学校			
	第 3 学年	第 4 学年	第 5 学年	第 6 学年
児童・生徒数	3,317 人	3174 人	2,987 人	3,061 人
学校数	41 校		41/41 校	41/41 校

(3) 各調査の設問数

ア 特定の課題に対する（教科等に関する調査）

①国語科 ※全体に占める設問割合を（ ）内に示してある。

分類		小学校				
		第 3 学年	第 4 学年	第 5 学年	第 6 学年	
全体		16	18	18	18	
基礎 活用	基礎	基礎 C	5 (31.3%)	5 (27.8%)	5 (27.8%)	5 (27.8%)
		基礎 B	5 (31.3%)	6 (33.3%)	6 (33.3%)	6 (33.3%)
	活用	活用 A	3 (18.8%)	4 (22.2%)	4 (22.2%)	4 (22.2%)
		活用 S	3 (18.8%)	3 (16.7%)	3 (16.7%)	3 (16.7%)
観点	国語への関心・意欲・態度		出題対象としない			
	話す・聞く能力		2 (12.5%)	2 (11.1%)	2 (11.1%)	2 (11.1%)
	書く能力		3 (18.8%)	3 (16.7%)	3 (16.7%)	3 (16.7%)
	読む能力		8 (50.0%)	10 (55.6%)	10 (55.6%)	10 (55.6%)
	言語についての知識・理解・技能		3 (18.8%)	3 (16.7%)	3 (16.7%)	3 (16.7%)
領域	音声・言語事項		5 (31.3%)	5 (27.8%)	5 (27.8%)	5 (27.8%)
	説明的文章		4 (25.0%)	5 (27.8%)	5 (27.8%)	5 (27.8%)
	文学的文章		4 (25.0%)	5 (27.8%)	5 (27.8%)	5 (27.8%)
	表現		3 (18.8%)	3 (16.7%)	3 (16.7%)	3 (16.7%)

中学校			
第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年	
2,045 人	2,064 人	2,070 人	児童・生徒数
23 校	23/23 校	23/23 校	学校数

※小学校第 3・4 学年、中学校第 1 学年は悉皆調査
 ※小学校第 5・6 学年、中学校第 2・3 学年は各校の希望利用

中学校			分類		
第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年			
18	16	16	全体		
5 (27.8%)	4 (18.8%)	4 (25.0%)	基礎 C	基礎	基礎 活用
6 (33.3%)	5 (31.3%)	5 (31.3%)	基礎 B		
4 (22.2%)	4 (25.0%)	4 (25.0%)	活用 A	活用	
3 (16.7%)	3 (18.8%)	3 (18.8%)	活用 S		
出題対象としない			国語への関心・意欲・態度		観点
2 (11.1%)	2 (12.5%)	2 (12.5%)	話す・聞く能力		
3 (16.7%)	3 (18.8%)	3 (18.8%)	書く能力		
10 (55.6%)	9 (56.3%)	9 (56.3%)	読む能力		
3 (16.7%)	2 (12.5%)	2 (12.5%)	言語についての知識・理解・技能		
5 (27.8%)	4 (25.0%)	4 (25.0%)	音声・言語事項		領域
5 (27.8%)	5 (31.3%)	5 (31.3%)	説明的文章		
5 (27.8%)	4 (25.0%)	4 (25.0%)	文学的文章		
3 (16.7%)	3 (18.8%)	3 (18.8%)	表現		

※中学校第 1 学年は、出題が前学年(小学校)の範囲のため、
 小学校の観点・領域を用いて調査を構成している。

②算数・数学科 ※全体に占める設問割合を（ ）内に示してある。

分類			小学校			
			第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
全体			22	22	25	25
基礎 活用	基礎	基礎 C	6 (27.3%)	6 (27.3%)	7 (28.0%)	7 (28.0%)
		基礎 B	9 (40.9%)	9 (40.9%)	10 (40.0%)	10 (40.0%)
	活用	活用 A	5 (22.7%)	5 (22.7%)	6 (24.0%)	6 (24.0%)
		活用 S	2 (9.1%)	2 (9.1%)	2 (8.0%)	2 (8.0%)
観点	算数への関心・意欲・態度		出題対象としない			
	数学的な考え方		8 (36.4%)	8 (36.4%)	10 (40.0%)	10 (40.0%)
	数量や図形についての技能		8 (36.4%)	8 (36.4%)	8 (32.0%)	8 (32.0%)
	数量や図形についての知識・理解		6 (27.3%)	6 (27.3%)	7 (28.0%)	7 (28.0%)
領域	A 数と計算		9 (40.9%)	9 (40.9%)	9 (36.0%)	9 (36.0%)
	D 数量関係		5 (22.7%)	5 (22.7%)	6 (24.0%)	6 (24.0%)
	B 量と測定		4 (18.2%)	4 (18.2%)	4 (16.0%)	4 (16.0%)
	C 図形		4 (18.2%)	4 (18.2%)	6 (24.0%)	6 (24.0%)

③理科 ※全体に占める設問割合を（ ）内に示してある。

分類			小学校			
			第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
全体				20	—	—
基礎 活用	基礎	基礎 C		7 (25.0%)	—	—
		基礎 B		7 (35.0%)	—	—
	活用	活用 A		4 (20.0%)	—	—
		活用 S		2 (10.0%)	—	—
観点	自然事象への関心・意欲・態度		出題対象としない			
	科学的な思考・表現			7 (35.0%)	—	—
	観察・実験の技能			6 (30.0%)	—	—
	自然事象についての知識・理解			8 (40.0%)	—	—
領域	A エネルギー			7 (35.0%)	—	—
	B 粒子			2 (10.0%)	—	—
	C 生命			6 (30.0%)	—	—
	D 地球			5 (25.0%)	—	—

中学校			分類		
第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年			
25	25	25	全体		
7 (28.0%)	6 (24.0%)	6 (24.0%)	基礎 C	基礎	基礎 活用
10 (40.0%)	11 (44.0%)	11 (44.0%)	基礎 B		
6 (24.0%)	6 (24.0%)	6 (24.0%)	活用 A	活用	
2 (8.0%)	2 (8.0%)	2 (8.0%)	活用 S		
出題対象としない			数学への関心・意欲・態度		観点
10 (40.0%)	9 (36.0%)	9 (36.0%)	数学的な見方や考え方		
8 (32.0%)	11 (44.0%)	11 (44.0%)	数学的な技能		
7 (28.0%)	5 (20.0%)	5 (20.0%)	数量や図形などについての知識・理解		
9 (36.0%)	13 (52.0%)	12 (36.0%)	数と式 A		領域
6 (24.0%)			2 (8.0%)	2 (8.0%)	
		3 (12.0%)	3 (12.0%)	資料の活用 D	
4 (16.0%)	7 (28.0%)	8 (32.0%)	図形 B		
6 (24.0%)					

中学校			分類		
第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年			
20	—	—	全体		
7 (25.0%)	—	—	基礎 C	基礎	基礎 活用
7 (35.0%)	—	—	基礎 B		
4 (20.0%)	—	—	活用 A	活用	
2 (10.0%)	—	—	活用 S		
出題対象としない			自然事象への関心・意欲・態度		観点
7 (35.0%)	—	—	科学的な思考・表現		
6 (30.0%)	—	—	観察・実験の技能		
8 (40.0%)	—	—	自然事象についての知識・理解		
2 (10.0%)	—	—	エネルギー A		領域
6 (30.0%)	—	—	粒子 B		
7 (35.0%)	—	—	生命 C		
5 (25.0%)	—	—	地球 D		

※中学校第 1 学年は、出題が前学年(小学校)の範囲のため、
小学校の観点・領域を用いて調査を構成している。

④外国語 ※全体に占める設問割合を（ ）内に示してある。

分類			小学校			
			第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
全体						
基礎 活用	基礎	基礎 C				
		基礎 B				
	活用	活用 A				
		活用 S				
観点	コミュニケーションへの関心・意欲・態度					
	外国語への慣れ親しみ					
	言語や文化に関する気付き					
領域						

※小学校第3学年から第6学年、及び中学校第1学年は調査対象としない。

イ 意識・実態調査（学習・生活についてのアンケート）

①自己意識・生活実態 ※各設問（質問項目）と観点の対応は、pp.126-139.を参照

領域	観点	設問数
自己 意識	学校生活の充実度	2
	自己効力感(自由の感度)	7
	他者への受容(相互承認の感度①)	3
	他者からの受容(相互承認の感度②)	4
	自己の受容(自己承認の感度)(自己肯定感)	3
	内発的な学習意欲	4
	時間的展望	3
	道徳的実践力	4
	生命尊重体験	3
	国際社会への関心・関わり	3
	今住んでいる地域への関心・関わり	4
	集合的(社会)効力感 (相互承認(触発)の感度③)	3 ※全て複数領域に該当する設問
生活 実態	基本的な生活習慣	4
	規律ある学校生活	4
計		48

※複合領域の設問が含まれるため、各領域の設問数合計が全体数を超える。

中学校			分類		
第1学年	第2学年	第3学年			
	25	25	全体		
	6(24.0%)	6(24.0%)	基礎 C	基礎	基礎 活用
	11(44.0%)	11(44.0%)	基礎 B		
	5(20.0%)	5(20.0%)	活用 A		
	3(12.0%)	3(12.0%)	活用 S	活用	
	出題対象としない		コミュニケーションへの関心・意欲・態度		
	11(44.0%)	8(32.0%)	外国語表現の能力		
	16(64.0%)	19(76.0%)	外国語理解の能力		
	7(28.0%)	7(28.0%)	言語や文化についての知識・理解		
	8(32.0%)	5(20.0%)	聞くこと ア	領域	
	5(20.0%)	5(20.0%)	話すこと イ		
	7(28.0%)	13(52.0%)	読むこと ウ		
	7(28.0%)	4(16.0%)	書くこと エ		

②学習状況、部活動への所属状況

観点		設問数
学習 状況	情報を収集し活用する能力	2
	学習方略一般(学び方)	6
	協働学習(学びの協同化)	4
	個別学習(学びの個別化)	7
	総合的な学習の時間(学びの課題探究化)	2
	読書冊数	1
	学習時間	4(平日/休日、自己/塾・家庭教師等)
	言語活動(国語科)	8 ※中学校第1学年まで 9 ※中学校第2・3学年
	算数・数学的活動(算数・数学科)	8
	問題解決活動(理科)	8
	コミュニケーション活動(外国語)	1 ※小第6学年、中第1学年 10 ※中学校第2・3学年
	ICT利活用(情報モラル含む)	5
	部活動への所属状況	1 ※中学校第2・3学年のみ
計	47～59	

③「杉並区教育ビジョン 2012」が掲げる「目指す人間像」「育みたい力」と
自己意識・生活実態領域の観点の関連

杉並区教育ビジョン 2012		意識・実態調査	
目指す人間像	育みたい力	自己意識・生活実態領域の観点	
夢に向かい、志をもって 自らの道を拓く人	1 自分のもち味を見付け、 自ら学び、考え、判断し、 行動する力	内発的な学習意欲(4) 時間的展望(3)	学校生活 の充実度 (2)
	2 変化の時代を捉え、 たくしく生きる心と体の力	<u>☆自己効力感(7)</u> (自由の感度) <u>☆自己の受容(3)</u> (自己承認の感度)(自己肯定感) 基本的な生活習慣(4) 規律ある学校生活(4)	
地域・社会・自然と共に生きる人 「かかわり」を大切にし、	5 持続可能な社会を目指し、 次代を共に支えていく力	国際社会への関心・関わり(3) 今住んでいる地域への関心・関わり(4) <u>☆集合的(社会)効力感(3)</u> (相互承認(触発)の感度③)	
	3 豊かな感性をもち、 感動を分かち合う力	生命尊重体験(3) <u>☆他者への受容(3)</u> (相互承認の感度①) <u>☆他者からの受容(4)</u> (相互承認の感度②)	
	4 他者の存在を認め、 多様な関係を結ぶ力	道徳的実践力(4)	

※ () 内の数値は、各領域に含まれる質問項目数を示す。

※ ☆ は、各目指す人間像・育みたい力において中核となる概念を示す。

Ⅱ 調査結果の概要

1 杉並区教育ビジョン 2012 に準拠した調査結果の経年

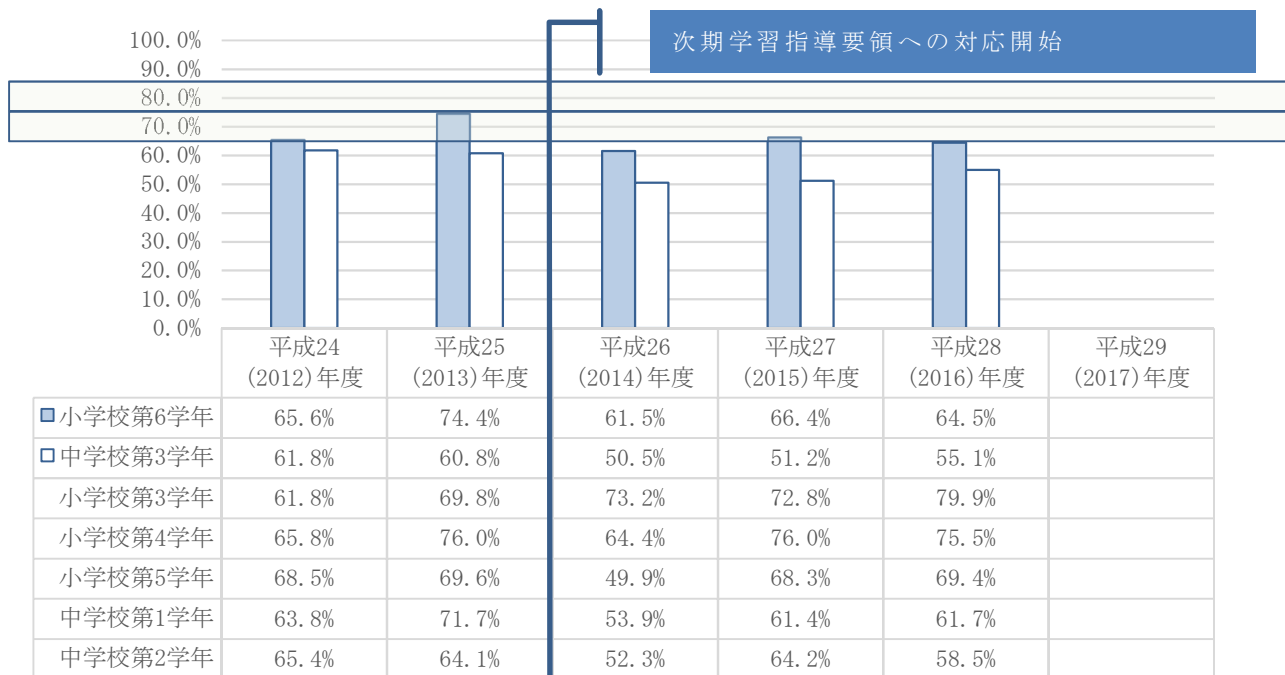
(1) 「杉並区教育ビジョン 2012」と杉並区独自の学力等調査

杉並区教育委員会は、平成 24 年度、区の新たな基本構想を受け、今後 10 年を見据えた目指す教育を示す「杉並区教育ビジョン 2012」を策定した。「共に学び、支え、創る」に象徴される本ビジョンは、不可分に支え合う二つの人間像「自らの道を拓く人」「共に生きる人」を目指し、重視する取組視点として①「学び」と「循環」、②「連続性」と「きめ細かさ」、③「かかわり」と「つながり」を設定する。これら取組の視点は教育の質的充実を志向するものであり、旧ビジョン下に展開した区費教員の養成・採用、30 人程度学級の実施、学校支援本部の設置、地域運営学校の指定などを基盤とする具体的な実行計画を「杉並区教育ビジョン 2012 推進計画」にまとめている。

推進計画は、「I 学びをつなげ、切れ目のない教育を進めます」を筆頭とした 7 つの目標から構成される。そして、目標 I の達成指標の一つに設定されるのが、本調査から算出の「中学校第 3 学年 R3 以上の生徒の割合」^[i]である。ビジョン 2012 の終了となる平成 33 年度の目標値 80%に向け、例えば教育行政は、各校の実情に応じた教育活動を、限りある教育資源を適正に（傾斜）配分することを通じ、個別具体的に支援する。つまり調査結果は、資源配分・支援のための情報源でもある。

なお、本調査は、平成 26 年度から、小学校は 32 年度、中学校は 33 年度の全面実施が見込まれる次期学習指導要領への対応を開始した。これからの時代を生きる児童・生徒全てに、生きて働く「知識・技能」の習得、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成、そして、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養を期すため、より高度な目標をもって調査内容を企画している。

(3) 「杉並区教育ビジョン 2012 推進計画」の目標に準拠した調査結果の経年



[i] ビジョン 2012 推進計画での指標名は「杉並区立中学 3 年生の学習習熟度」としている。

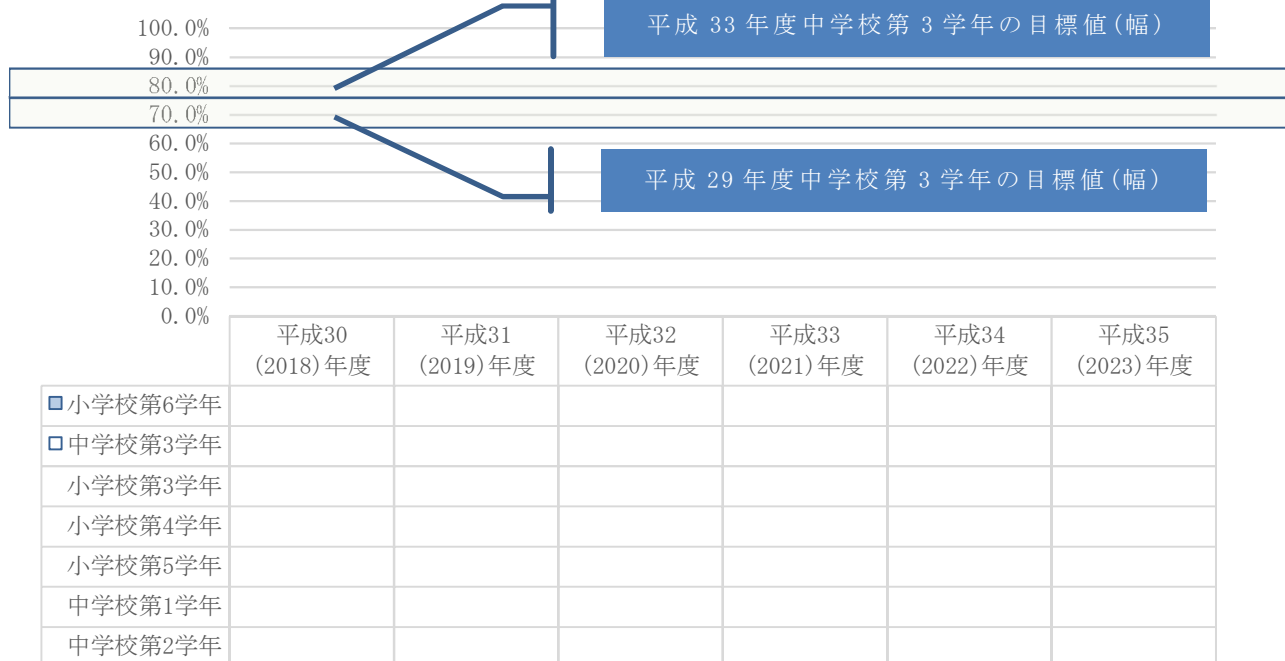
(2) 「杉並区教育ビジョン 2012 推進計画」の目標と調査結果の分析・考察の留意点

一人一人のよりよく生きたいという願い、それを実現していく成長の過程は、「一様のみでなく多様」と捉えることが妥当である。しかし私たちは、義務教育の終了までに、全ての子どもに対し、よりよい人生を切り拓く基盤を確実に築かねばならない。先の 3 つの取組視点を結束し目標 I に向かう「就学前から義務教育期間を通じた一貫性のある教育（幼保小連携教育・小中一貫教育）」は、一人一人の多様性に応じるため、成長を中・長期的な視野から捉える教育を志向する。と同時に目標 I は、義務教育終了段階の学力・学習状況を達成指標（の一つ）に設定し、且つ、目標値を（集団の代表値でなく）「割合（人数）」とすることで、「全ての子どもに対する確実な成長の実現」という教育の目的を、常に自覚させるものである。

私たちは、目標 I を通じてビジョンの目指す像、ひいては学校教育の目的に迫るため、中・長期的な視野に立ち、一人一人の成長を「つながり」【系統性】をもって思い描く。その実現のための学びの方法を、同じく「つながり」【連続性】をもって考え出す。個々の限界を乗り越えるため、互いを知り、分かり、「生かし合い」【協働】する。目標及びその系統性に準拠した連続的な評価^[ii]を体現する本調査の結果は、校種や学年、学級、さらには学校を超えた【協働】の基盤としても活用されることが望ましい。

以下、結果の分析・考察に当たっては、上述や「結果の取扱いと活用」（p.5）に十分配慮する必要がある。加えて、目標値や現状値も、学年や個体の差を考慮し、ある程度の「幅」をもって捉えることが必要である。平成 26 年度からは、次期学習指導要領への対応のため、より高度な内容をもって調査を実施していることにも留意されたい。

※R3 以上の割合（教科等平均）、平成 26 年度調査で次期学習指導要領への対応開始



[ii] 『すぎなみ 9 年カリキュラム—外国語教育編』、p. 22, 47-49. など

2 国語科 特定の課題に対する調査

(1) 5段階の学習状況の評定（学力段階）

校種・学年		平均	全体に占める各学習状況の児童生徒の割合				
			R1	R2	R3	R4	R5
小学校	第3学年	3.01	8.8%	10.4%	60.5%	11.8%	8.5%
	第4学年	2.92	9.6%	13.8%	59.4%	9.8%	7.4%
	第5学年	3.00	6.5%	19.6%	50.9%	13.1%	9.9%
	第6学年	2.96	8.4%	24.0%	41.7%	14.3%	11.5%
中学校	第1学年	2.97	9.5%	22.4%	38.6%	20.4%	9.1%
	第2学年	2.84	9.3%	30.1%	37.3%	14.6%	8.8%
	第3学年	2.84	10.0%	26.4%	38.8%	19.3%	5.5%

0.0% 20.0% 40.0% 60.0% 80.0% 100.0%

※学習指導要領に準拠した調査実施の前学年の学習状況の評定（学力段階）

R5 発展的な力が身に付いている R4 十分定着がみられる

R3 おおむね定着がみられる（最低限の到達目標）

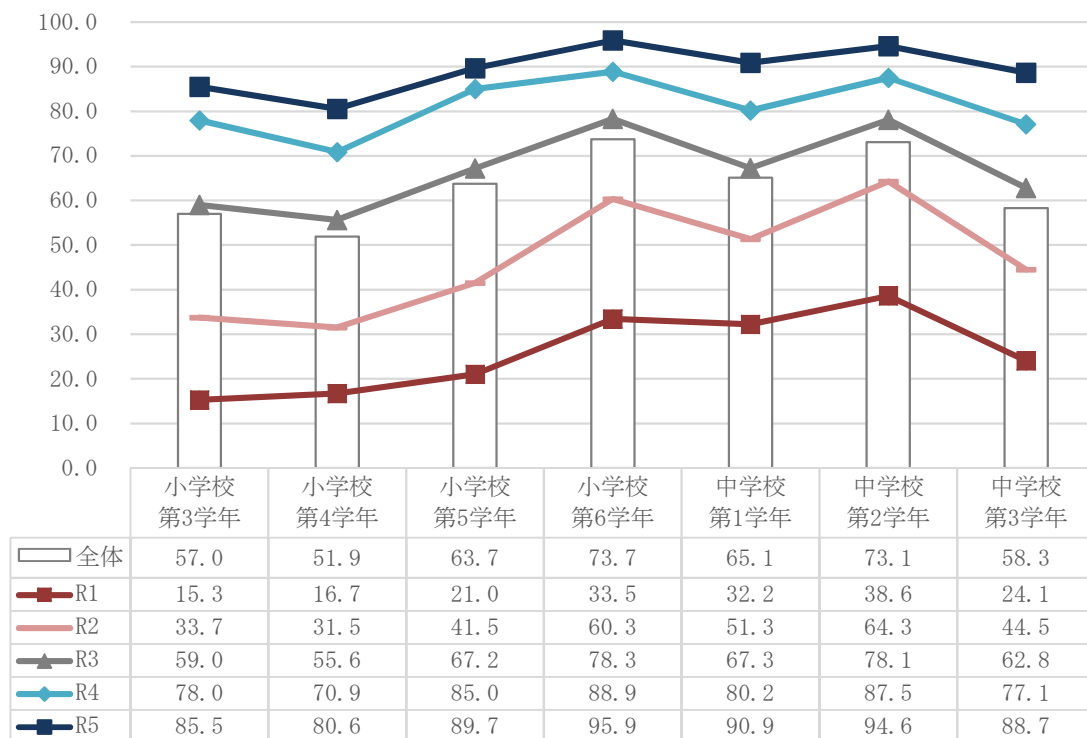
R2 特定の内容でつまずきがある R1 学び残しが多い

(3) 基礎・活用別、観点別、領域別の平均正答率（標準偏差）

分類			小学校			
			第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
全体			57.0(21.0)	51.9(19.5)	63.7(20.1)	73.7(17.5)
基礎 活用	基礎	基礎 C・B	65.4	55.0	66.3	80.9
	活用	活用 A・S	43.0	47.0	59.7	62.4
観点	国語への関心・意欲・態度		出題対象としない			
	話す・聞く能力		86.3	76.4	83.1	89.5
	書く能力		52.2	40.2	53.5	67.1
	読む能力		53.0	48.8	63.6	71.2
言語についての知識・理解・技能		53.1	57.5	61.5	78.2	
領域	音声・言語事項		66.4	65.1	70.1	82.7
	説明的文章		69.0	38.8	68.3	69.8
	文学的文章		36.9	58.9	58.8	72.6
	表現		52.2	40.2	53.5	67.1

※平均正答率や標準偏差の単純な比較は、難易度の高低や正答率を代表指標としない調査の特性（p.5）上推奨しない。

(2) 学習状況の評定（学力段階）ごとの平均正答率（教科全体）

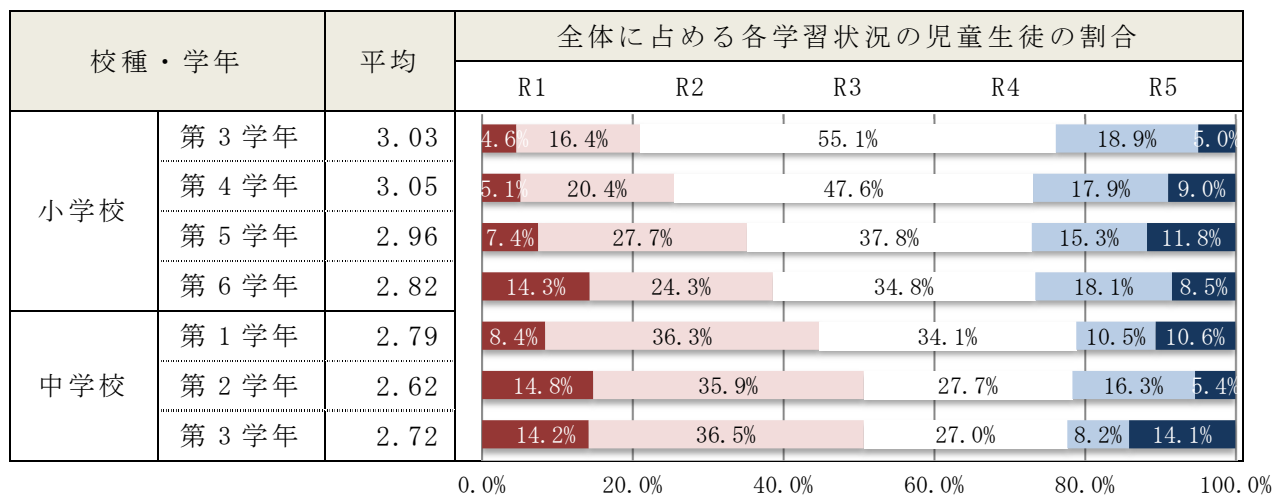


中学校			分類		
第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年			
65.1(16.6)	73.1(15.5)	58.3(17.9)	全体		
71.3	78.2	66.1	基礎 C・B	基礎	基礎 活用
55.5	66.5	48.3	活用 A・S	活用	
出題対象としない			国語への関心・意欲・態度		観点
93.7	92.4	83.7	話す・聞く能力		
69.3	67.0	48.0	書く能力		
56.8	73.8	56.0	読む能力		
69.8	59.7	58.5	言語についての知識・理解・技能		領域
79.4	76.1	71.1	音声・言語事項		
54.3	61.9	55.0	説明的文章		
59.3	88.7	57.4	文学的文章		
69.3	67.0	48.0	表現		

※中学校第1学年は、出題が前学年(小学校)の範囲のため、小学校の観点・領域を用いて調査を構成している。

3 算数・数学科 特定の課題に対する調査

(1) 5段階の学習状況の評定（学力段階）



※学習指導要領に準拠した調査実施の前学年の学習状況の評定（学力段階）

R5 発展的な力が身に付いている R4 十分定着がみられる

R3 おおむね定着がみられる（最低限の到達目標）

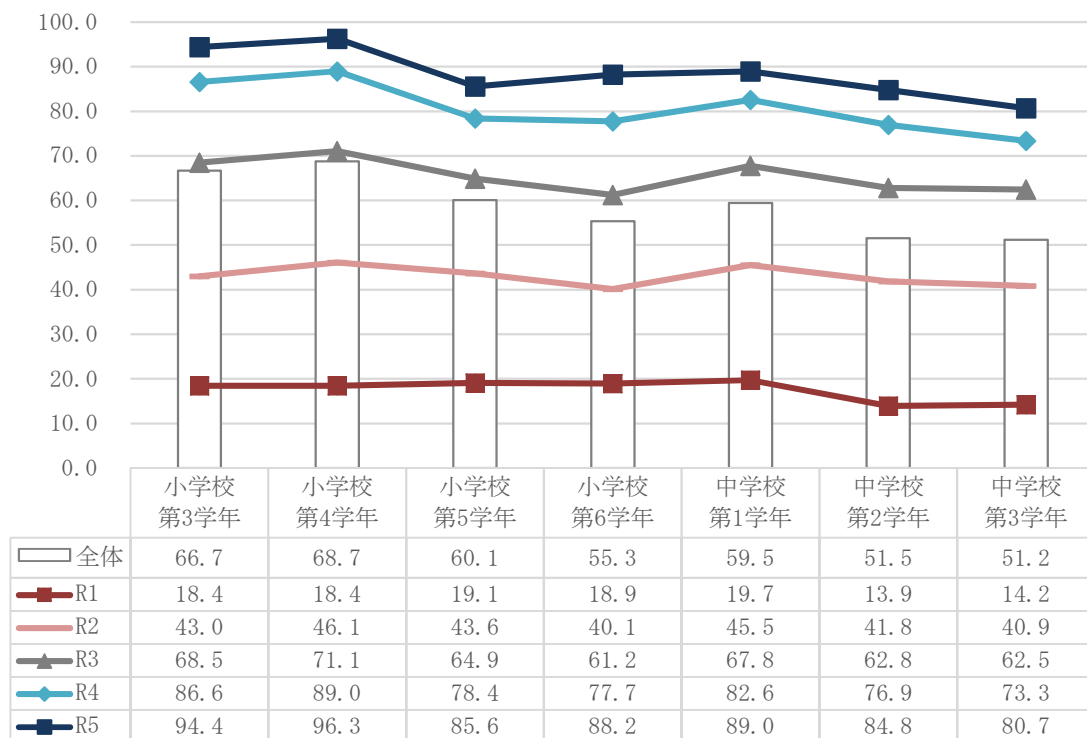
R2 特定の内容でつまずきがある R1 学び残しが多い

(3) 基礎・活用別、観点別、領域別の平均正答率（標準偏差）

分類			小学校			
			第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
全体			66.7 (19.1)	68.7 (20.6)	60.1 (19.5)	55.3 (22.2)
基礎 活用	基礎	基礎 C・B	74.0	75.4	72.0	64.5
	活用	活用 A・S	51.0	54.5	34.8	35.8
観点	算数への関心・意欲・態度		出題対象としない			
	数学的な考え方		51.8	56.2	39.1	37.4
	数量や図形についての技能		74.1	73.2	70.1	69.5
	数量や図形についての知識・理解		76.7	79.6	78.7	64.8
領域	A 数と計算		70.9	68.4	70.0	62.2
	D 数量関係		63.0	71.3	47.0	50.3
	B 量と測定		71.5	68.5	66.2	54.4
	C 図形		57.1	66.7	54.2	50.7

※平均正答率や標準偏差の単純な比較は、難易度の高低や正答率を代表指標としない調査の特性（p.5）上推奨しない。

(2) 学習状況の評定（学力段階）ごとの平均正答率（教科全体）

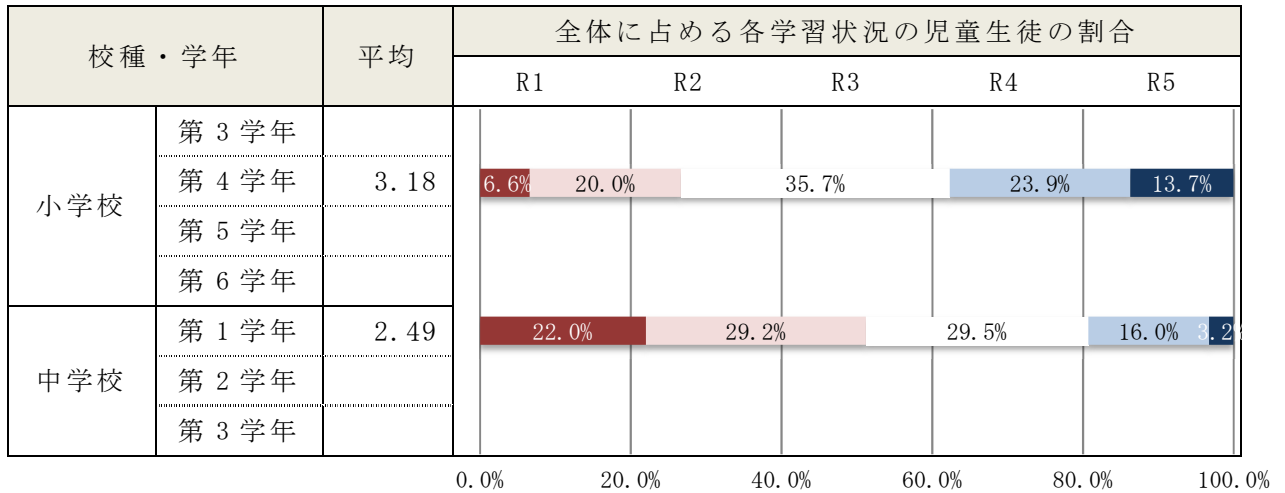


中学校			分類		
第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年			
59.5 (20.5)	51.5 (22.2)	51.2 (21.9)	全体		
66.5	61.4	63.5	基礎 C・B	基礎	基礎
44.5	30.6	25.1	活用 A・S	活用	活用
出題対象としない			数学への関心・意欲・態度		観点
43.7	30.8	28.4	数学的な見方や考え方		
75.4	64.1	65.2	数学的な技能		
63.8	61.4	61.6	数量や図形などについての知識・理解		
59.3	62.7	65.8	数と式 A		領域
69.8	29.4	34.3	関数 C		
	44.7	35.8	資料の活用 D		
51.4	59.6	48.2	図形 B		
60.7					

※中学校第1学年は、出題が前学年(小学校)の範囲のため、小学校の観点・領域を用いて調査を構成している。

4 理科 特定の課題に対する調査

(1) 5段階の学習状況の評定（学力段階）



※学習指導要領に準拠した調査実施の前学年の学習状況の評定（学力段階）

R5 発展的な力が身に付いている R4 十分定着がみられる

R3 おおむね定着がみられる（最低限の到達目標）

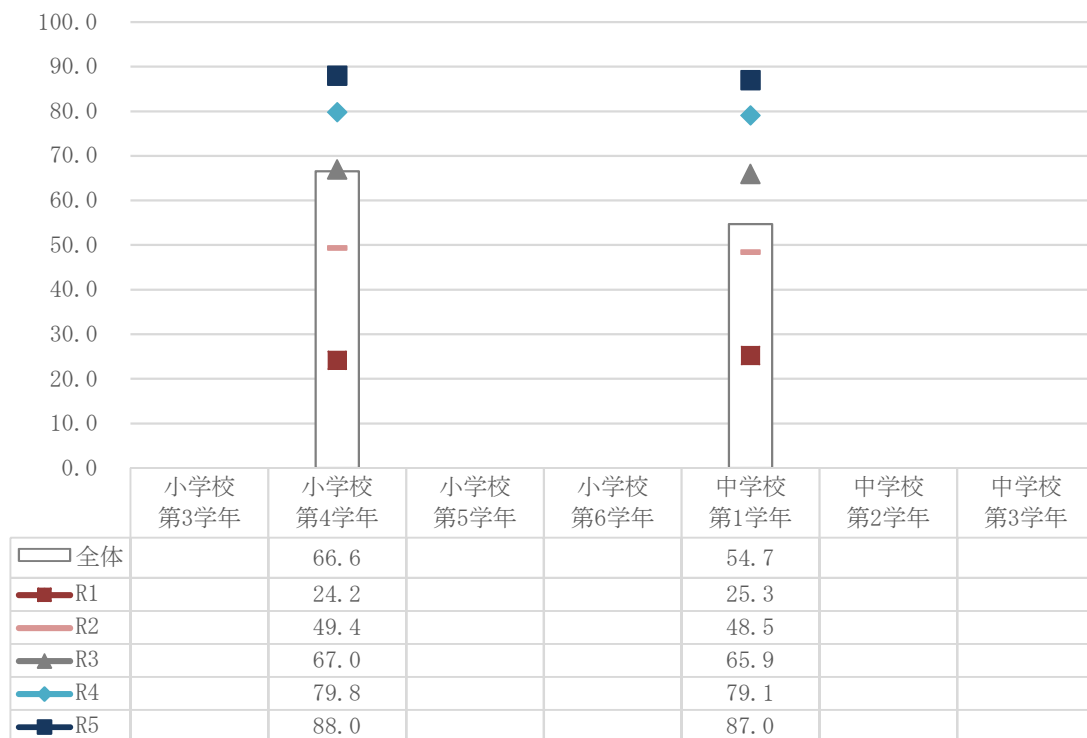
R2 特定の内容でつまずきがある R1 学び残しが多い

(3) 基礎・活用別、観点別、領域別の平均正答率（標準偏差）

分類			小学校			
			第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
全体				66.6 (17.9)	—	—
基礎 活用	基礎	基礎 C・B	対象学年 としない	68.7	—	—
	活用	活用 A・S		61.7	—	—
観点	自然事象への関心・意欲・態度			出題対象としない		
	科学的な思考・表現			60.1	—	—
	観察・実験の技能			63.5	—	—
	自然事象についての知識・理科			72.5	—	—
領域	A エネルギー			68.2	—	—
	B 粒子			78.0	—	—
	C 生命			66.2	—	—
	D 地球			60.1	—	—

※平均正答率や標準偏差の単純な比較は、難易度の高低や正答率を代表指標としない調査の特性（p.5）上推奨しない。

(2) 学習状況の評定（学力段階）ごとの平均正答率（教科全体）

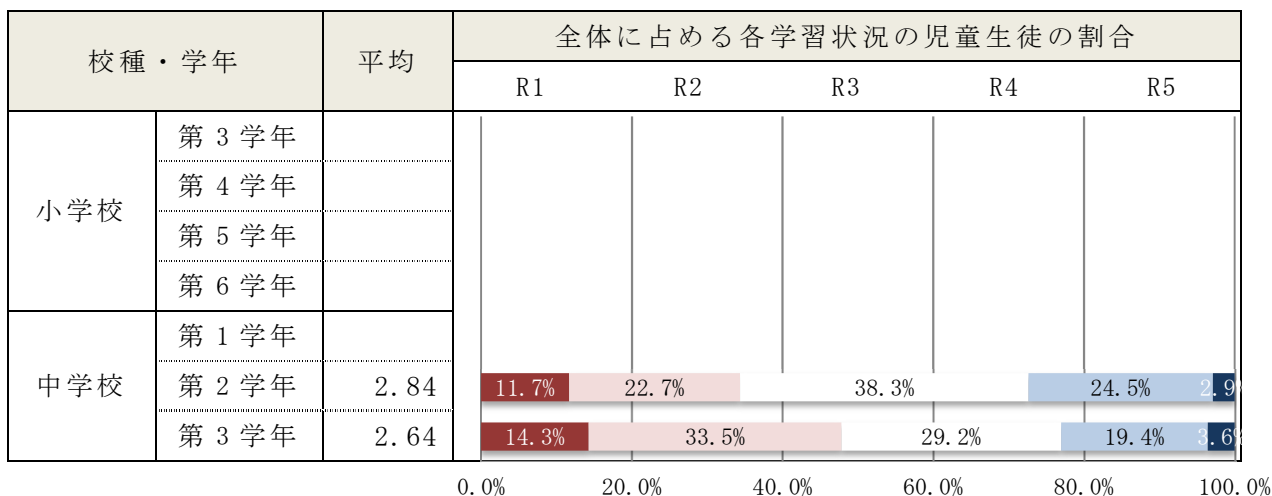


中学校			分類		
第1学年	第2学年	第3学年			
54.7 (20.3)	—	—	全体		
59.2	—	—	基礎 C・B	基礎	基礎
44.1	—	—	活用 A・S	活用	活用
出題対象としない			自然事象への関心・意欲・態度		
49.2	—	—	科学的な思考・表現		
59.0	—	—	観察・実験の技能		
59.3	—	—	自然事象についての知識・理科		
68.5	—	—	エネルギー A		
61.7	—	—	粒子 B		
51.9	—	—	生命 C		
44.5	—	—	地球 D		

※中学校第1学年は、出題が前学年(小学校)の範囲のため、小学校の観点・領域を用いて調査を構成している。

5 外国語 特定の課題に対する調査

(1) 5段階の学習状況の評定（学力段階）



※学習指導要領に準拠した調査実施の前学年の学習状況の評定（学力段階）

R5 発展的な力が身に付いている R4 十分定着がみられる

R3 おおむね定着がみられる（最低限の到達目標）

R2 特定の内容でつまずきがある R1 学び残しが多い

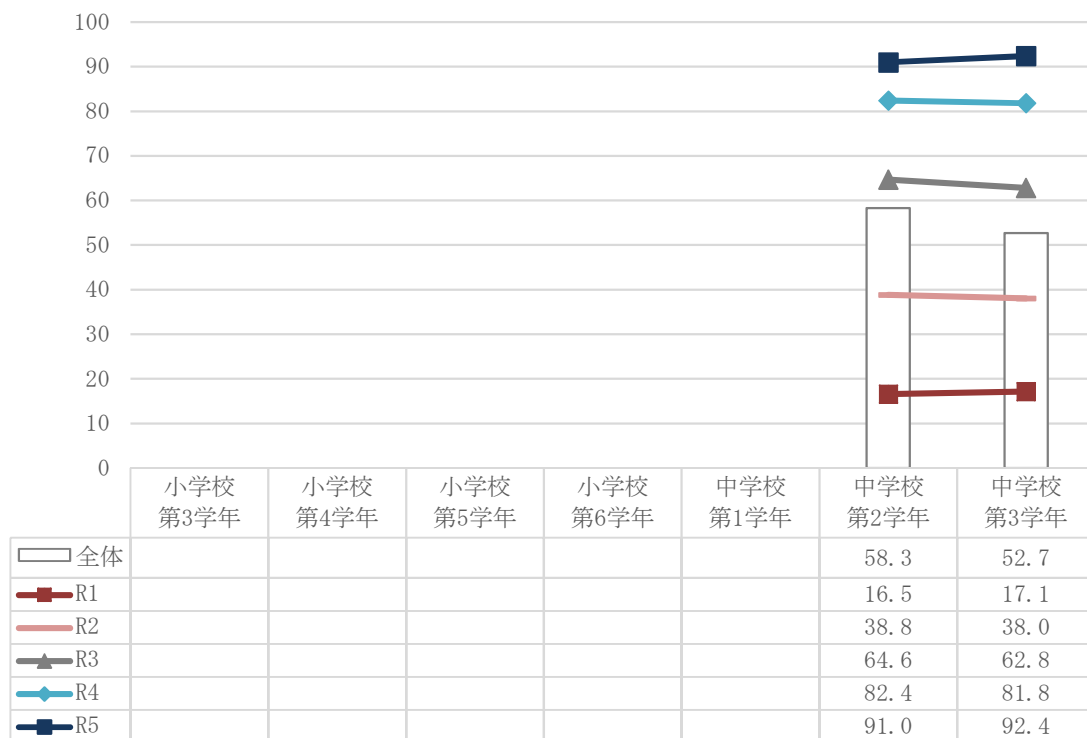
(3) 基礎・活用別、観点別、領域別の平均正答率（標準偏差）

分類			小学校			
			第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
全体						
基礎 活用	基礎	基礎 C・B				
	活用	活用 A・S				
観点	コミュニケーションへの関心・意欲・態度					
	外国語への慣れ親しみ					
	言語や文化に関する気付き					
領域						

※小学校第3学年から第6学年、及び中学校第1学年は調査対象としない。

※平均正答率や標準偏差の単純な比較は、難易度の高低や正答率を代表指標としない調査の特性（p.5）上推奨しない。

(2) 学習状況の評定（学力段階）ごとの平均正答率（教科等全体）

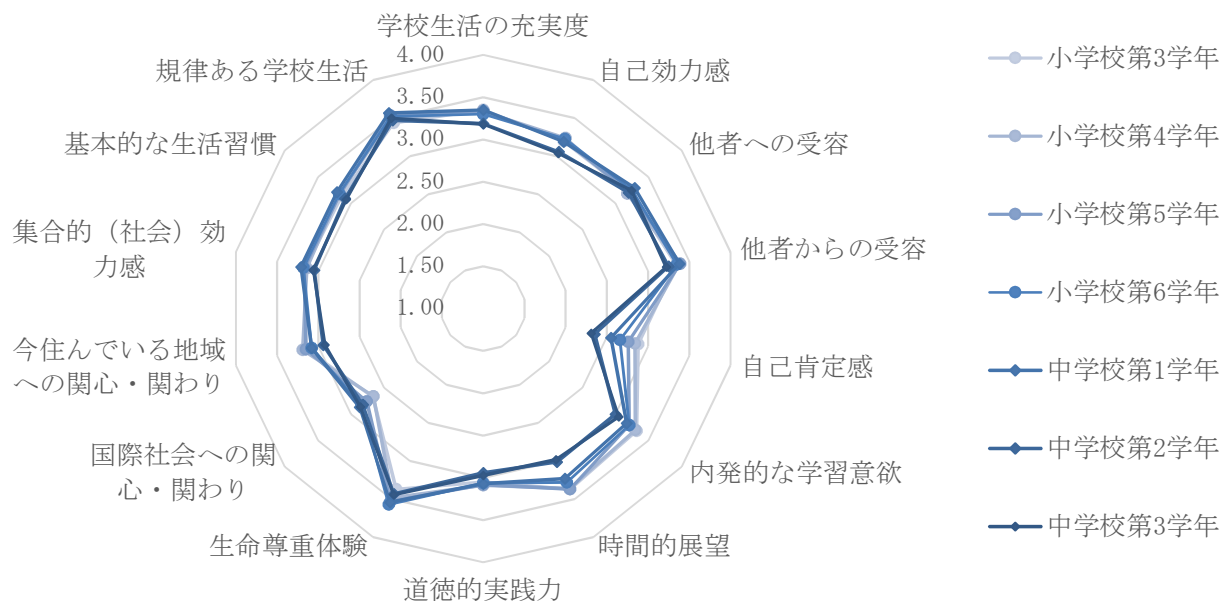


	中学校			分類		
	第1学年	第2学年	第3学年			
		58.3 (23.1)	52.7 (23.6)	全体		
		63.2	57.3	基礎 C	基礎	基礎
		47.8	42.8	活用 A	活用	活用
		出題対象としない		コミュニケーションへの関心・意欲・態度		観点
		49.6	45.4	外国語表現の能力		
		60.2	52.9	外国語理解の能力		
		70.4	66.9	言語や文化についての知識・理解		
		59.7	57.9	聞くこと	ア	領域
		53.3	59.0	話すこと	イ	
		59.4	53.1	読むこと	ウ	
	49/8	23.2	書くこと	エ		

※中学校第1学年は、出題が前学年(小学校)の範囲のため、
外国語科の調査対象としない。

6 学習・生活についてのアンケート 意識・実態調査

(1) 自己意識、生活実態に係る観点の平均値



観点	小学校				中学校			
	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	第1学年	第2学年	第3学年	
自己意識	学校生活の充実度	3.35	3.33	3.34	3.30	3.35	3.19	3.18
	自己効力感 (自由の感度)	3.20	3.24	3.21	3.23	3.19	3.06	3.04
	他者への受容 (相互承認の感度①)	3.21	3.18	3.22	3.25	3.29	3.20	3.24
	他者からの受容 (相互承認の感度②)	3.34	3.38	3.39	3.35	3.38	3.25	3.22
	自己の受容 (自己承認の感度) (自己肯定感)	2.88	2.84	2.76	2.66	2.55	2.35	2.31
	内発的な学習意欲	3.32	3.30	3.21	3.21	3.17	3.00	3.05
	時間的展望	3.37	3.36	3.37	3.28	3.23	3.01	2.98
	道徳的実践力	3.05	3.09	3.08	3.06	3.07	2.94	2.97
	生命尊重体験	3.37	3.48	3.53	3.57	3.54	3.43	3.44
	国際社会への 関心・関わり	2.67	2.66	2.76	2.84	2.87	2.82	2.86
	今住んでいる地域への 関心・関わり	3.15	3.19	3.15	3.08	3.08	2.94	2.92
	集会的（社会）効力感 (相互承認(触発)の感度③)	3.16	3.14	3.17	3.18	3.21	3.05	3.06
生活実態	基本的な生活習慣	3.14	3.18	3.17	3.18	3.21	3.09	3.07
	規律ある学校生活	3.44	3.50	3.54	3.52	3.57	3.47	3.50

※回答を肯定=4～否定=1と換算し、各領域に含まれる項目の回答結果を平均した値